

新しい詩の声 2018・作品

〈最優秀賞〉

岡本 直美

ひとつ

あたかもそこに空があつたように
天を見ていた

空には空と呼ばれるところと
天と呼ばれるところがあり
あなたがこの世を去つてから
空は天ひとつになった
人はいつかそこへ行くと教えられていたから

あなたに話しかけるなら天だった
呼びかけに返ってくる声はなくとも
ひとり寂しいときは天を見上げた
天は白一色 それしか見えなくても

空のない私に
雨は空つぼの箱から降ってきた
日々は色もなく過ぎていき

朝日を夕やけを懐かしく思い出していた
そろそろ 空を取り戻しに行こうかと思う
私にはまだ明日の空が必要だと思った
空の下に
あなたも望んでいるような気がした

天ははるか遠く
今そこに、空ひとつ

〈優秀賞〉

福本 恵子

おにのかぞえかた

めんをつけると

こぶしをかためて みな

ちかづいてくる

いま じぶんが

いっぴきか

いっとうか

おには わからない

まめのつぶてをうけて

そとへ そとへ

おわれながら

(ひよっとすると ひとり)

おにのなかで やどる

めんをはずし

ちらばった まめをみる

ひしゃげているのがある

いよいよ

ひとりが

くつきりする

めんのはずせない

おにのかぞえかたが

たぶん

わかる

〔優秀賞〕

三好 郁子

熊

深い陰影を右側に置いて
ベッドの隅に熊がいる
生きてはいないが三十年そこにいる
達ちゃんが死んだのも知っている

私は熊を抱いて庭に出た
大きな水瓶に熊を沈めた
その夜遅く濡れて足をくねらせ
熊はベッドのいつもの席に座っていた
熊の目からずっと水滴が落ち私の指先を濡らし
達ちゃんが目を開いた
私は濡れた指先を伸ばして彼に触れた
待っていたのよ

五年も一度も現れないなんて不人情ね

どこに行っていたのよ
水甕と海とどこかで連なっているのか
深く貫く流れがあるのか

水死した達ちゃんの膨れた腹を押すと
潮を吹き苦い胃液を垂らした
腹から鰹や鰯やトビウオなんぞが出てきたら
お伽話になって
達ちゃんもめでたく亀に乗って帰って来る
夜半にはもう彼はいなくて
水瓶を覗いたら月が揺れていた

〈優秀賞〉

山田 裕樹

ふるさと

偽物のたぬき蕎麦と

偽物の木の葉どんぶりの間に

迷い込んでいる

私たちは

長い長いトンネルを抜け

互いに改札口の対面からタッチしたあと

その電子音の中に飲み込まれてしまった

(のだからか)

しかしながら

翌日も私たちは

生きていたのだが

偽物ばかり置かれたディスプレイの中には

あなたの姿しかない

私はというと

蕎麦職人につまみ出されてしまつて

濡れたアスファルトの上で

羽さえ閉じずに横たわっている

その翌日私は死んだ

目の前には湯気の立つ木の葉どんぶりがある

卵とじの隙間からのぞく

刻まれた三つ葉の淡い緑色が

私のふるさとになった

受賞のことば・受賞者略歴

●最優秀賞

岡本 直美（おかもと なおみ）

〈受賞の言葉〉

この度は最優秀賞を受賞出来ましたことを大変嬉しく、また心より感謝申し上げます。

受賞しました作品は亡き父を思い書いたものです。今年父の七回忌を迎え、父を見送った当時のこと、今日までの日々、時折感じます寂しさを綴ったものです。これまで父のことや家族のことを詩に書いてきましたが、その度に家族の有難さを感じています。

詩を書き始めて十数年が経ち、年月を重ね、詩にすることが自然に感じられるようになった今、この度の受賞を励みに今後も良い詩を書いていきたいと思えます。

〈略歴〉

一九八四年生まれ、佐賀県在住。

十代の半ばより詩を書き始め、佐賀新聞の読者文

芸に投稿を始める（ペンネーム・岡本なお美）。
二〇一五年、第五三回・佐賀県文学賞・詩一席。
二〇一六年、第五四回・佐賀県文学賞・詩二席。
二〇一七年、第五五回・佐賀県文学賞・詩二席。
佐賀県の同人誌「扉」「滾々」に在籍。

●優秀賞

福本 恵子（ふくもと けいこ）

〈受賞の言葉〉

うれしいお知らせ、ありがとうございます。

詩を読むのがすきで、たのしみのひとつとしておりましたが、つくりはじめるようになりましたのは、だいぶ後になってからです。

つたないことばをすくっては、こっそりかきつける。ひとりよがりの十数年です。

この度は、みていただいたうえに、賞までいただけるなんて……。

本当にありがとうございました。

〈略歴〉

一九六六年十一月二九日、東京都品川区に生まれ

る。

事務員として勤めながら、三十歳ごろより詩をつくりはじめる。

日本児童文芸家協会・第八回つばさ賞・二席・詩「しょうが」。

日本児童文芸家協会・第二回作品奨励賞・佳作・詩「ねじ」「おてだま」。

愛知県名古屋市在住。

●優秀賞

三好 郁子（みよし いくこ）

〈受賞の言葉〉

この度は、私の拙い詩「熊」にお目をとめて頂き感謝申し上げます。

体長一メートルの縫いぐるみの熊がベッドにいます。長くそこにいるので彼は私のことはなんでも知っています。ときおり詩にも登場してくれます。寡黙ですが優れた役者です。

私は三十年近く、本州の西の端・山口市で詩を書いてきました。長年所属していました詩誌「らく

だ」が廃刊となり寂しい気持ちでおりました。奨励賞を頂き心が華やいでおります。

〈略歴〉

一九四七年一月二五日生まれ。

山口県山口市在住。

同人誌「風響樹」に所属。

●優秀賞

山田 裕樹（やまだ ゆうき）

〈受賞の言葉〉

このたびは優秀賞をいただきまして、ありがとうございます。本を書き終えた後に「なんとなく面白いものができたなあ」と満足していましたが、しばらくして読み返すと「わけがわからんなあ」と感じておりました。結果、良かったです。

私は『珈琲時光』という映画作品が好きで、これを見ると「さて、生きていこう」という気持ちになるので、同じように前向きな気分になれる詩なり短歌なりをこれからも作っていきたいです。賞金で息子たちにプラレールを買おうと思います。

〈略歴〉

一九八四年、福岡県生まれ。神奈川県在住。

山口大学教育学部総合文化教育課程文芸・芸能コースを卒業後、博物館のサービススタッフ等の職を経て、現在はIT企業に勤務。品質保証部門のマネージャーとしてスマートフォン向けアプリケーションの開発チームに所属。

大学時代の研究テーマは、サイレント映画の表現手法や、小津安二郎監督作品の演出方法など。妻とは大学時代にサークルで知り合い、現在はわんぱくな男の子二人を育てるために奮闘中。

作品募集と選考の概要

天野 英

日本詩人クラブは、昨年スタートした「新しい詩の声」の意志を受け継ぎ、第2回「新しい詩の声」として継続実施を行った。この活動は、広く現代詩作品を募集し、選考により賞を贈呈する。という行為であるが、募集・選考・賞の授与、ということを超えて、日本全国の幅広い詩文化の発展に寄与したいという意志と希望を置き、もって日本詩人クラブ全体としての活性化の一助にもしようというものである。

作品募集は、一般社団法人日本詩人クラブの名で、「新しい詩の声」作品募集のチラシを詩人クラブの全会員への配布資料に同封し、さらに公募ガイド社発行の「公募ガイド」への掲載を依頼した。2018年2月末日の締め切りとしたが、139名の応募者という昨年に続き大きな反応があった。応募者を地域で見ると全国広い地域からの参加であり、幅広い詩文化の発展に寄与したいという

思惑への、十分な応えでもあった。さらに、応募された全作品を読めば、それぞれの方のそれぞれを経験が、その果実としての詩に結実され表現された、かなり質の良い作品が、多く寄せられたことに驚き、また、この事業の継続への力を与えられた。

応募された方には、各自の詩への思いをも語って頂くためのオリエンテーションの場を準備中。参加の呼びかけなど実行する。

選考経過報告

佐相憲一

2018年4月26日、天野英・佐相憲一・塩野とみ子・鈴切幸子・曾我貢誠・長尾雅樹・原詩夏至（50音順）による選考委員会が開かれた。全国139名もの応募があり関心の高さがうかがわれた。

選考委員会は次の最終候補28作を選んだ。池田久雄・市川恵子・岡本直美・柏井萌美・加藤桂・久保俊彦・高裕香・後藤順・後藤光治・坂本昌子・佐藤里・三宮昭一・志村奏・城沢恵子・タナカジ

ユリ・田中淳一・田村全子・都筑里絵・鳥山守貞・ひおきとしこ・福本恵子・堀川央・三ツ谷直子・南雲和代・三好郁子・目加田ハルイチ・山田裕樹・和田憲政。ほかにも光る作品が多々寄せられ、選考委員たちを悩ませた。

その前の段階で、詩誌掲載発覚により未発表作の応募規定に反する作品が1名、規定行数を超える作品が1名、選考対象から外された。力作だけに違反が残念だが、公的な賞として応募規定順守に徹したい。

28作から選考委員の投票により13作を選び、各詩篇についてのプラス評価を出し合って鑑賞した。それをふまえてさらに投票を行い、7作までしぼった。最後に各詩篇のマイナス評価も出し合い、プラスの反論も出されて、白熱した討論が展開された。結果、最優秀賞は岡本直美「ひとつ」、優秀賞は順位なしで3名、福本恵子「おにのかぞえかた」、三好郁子「熊」、山田裕樹「ふるさと」（50音順）と決定した。

岡本直美「ひとつ」は、大切な人を亡くした後

の〈空〉のない〈天〉に語りかけながら、繊細な心の襞を丁寧な詩句で綴り、喪失感からやがて〈空〉を取り戻しに行こうかと思う／私にはまだ明日の空が必要だと思つた〉という新たな境地へ深まつていく過程が語られる。大きな生命自然の中にいる感覚を手放さないことで、亡くした存在への愛と悲しみがうねるような中に抱きとめられて癒やされ、明日へ向かう。しばられたテーマと語りの詩情、その全体に、最終段階の選考は全員一致でこの作品を最優秀とした。

福本恵子「おにのかぞえかた」は、ひらがなのみでやさしく綴られながら、鋭い思想性を内包している。〈まめのつぶてをうけて／そとへ そとへ／おわれ〉る鬼の存在は、群集のみならず鬼自身にとつても〈いっぴきか／いっとうか〉わからないが、ぶつけられたものを跳ね返す中で〈ひとり〉の人間であることを自覚する。さまざまな社会状況の〈鬼〉を想像させながら、かなしみとたくましさを感じさせる秀作だ。

三好郁子「熊」は、水死した〈達ちゃん〉の形

見となった〈熊〉を見つめるレクイエムの物語。水瓶をめぐる儀式の中に、作者の達ちゃんを想う心がイメージ豊かに展開される。おとき話や昔話の世界にも通じるやさしい語りが魅力だ。万感の想いを抑制のきいた抒情で物語るこの詩を書くまでには喪の歳月が必要だったに違いない。さびしさの中に故人と熊の存在感が刻印された秀作だ。

山田裕樹「ふるさと」は、独特の映像的な面白みの中に現代性が光る。偽物に溢れて実体感の希薄な状況のもとで見向きもされない存在を我れとして生死を見つめる。モノクロから終連劇的にカラーになる鮮烈さで、湯気と緑色の三つ葉に〈ふるさと〉を見出す。悲惨でひずんだ感じもありながらあつけらかんとしていて明るいものさえ読後に感じさせる。現代詩の技術をもった才能だ。

以上、報告を終えるにあたって、多様な作品と多様な評価基準が実感されたことをお伝えする。

選考委員

天野英・佐相憲一・塩野とみ子・鈴切幸子

曾我貢誠・長尾雅樹・原詩夏至